

朝風 戦争体験者はまだ眠れない

1. 「総合編 許し難き奴ら(2)」より

比島（フィリピン諸島）は特攻隊発祥の地である。あゝ神風特攻隊。それこそはなんらの勝利への目算もなしに大戦争に突入した日本軍が、我れに数百倍する物量と科学を有する大敵に追いつめられた結果、半ば自暴自棄的な日本軍の首脳陣が最後にたどり着いた、悪魔の着想の姿であった。

生還への道が全く閉ざされた特攻攻撃。日本以外の世界のどこの国にこんな着想をする国があるか。一体、こんな無謀な攻撃を実施した軍の上層部は若い兵士のいのちをなんだとっていたのか。そこまで追いつめられて、更に戦争を継続する必要があったのか。

特攻隊作戦が開始されたころ、いよいよ特攻機に乗り込む直前、その特攻隊員の辞世の声をラジオは日本全国に放送した。当時、首都防衛航空隊にいた私は、なんとも言えない思いでそれを聞いた。その特攻隊員の飛び立つ基地の名も階級も氏名も伏せられていたが、その声は肉親の耳に届き、親や兄弟は断腸の思いでそれを聞いたことだろう。なんたる悲劇！ なんたる残酷！

特攻攻撃を知らされたとき、ときの昭和天皇は沈痛な面持ちで、「それほどまでにやらなければならないのか」と言ったそうである。しかし天皇の口から、それならば、もう戦争はやめよ、の一言は遂に聞かれなかった。

2. 「総合編 許し難き奴ら(6)」より

その結果、田舎の小学校の先生になって平和な一生を過ごすはずだった一人の人間が、日本軍国主義のいけにえとなって、まだ十五歳の若い命を無惨に散らしたのである。

駆けつけた村人達が遺体を木から下ろし、会津若松の憲兵隊に届け出た。間もなくサイドカーに乗った曹長と伍長の二人の下士官憲兵がやって来た。拳銃を腰に吊し、長剣を提げ、茶色の革の長靴を履き、白地に赤で「憲兵」と墨書した腕章を左の腕に通した、見るからに他を威圧する物々しいでたちのその二人の憲兵は、サイドカーを降りるや、足早やに彼の遺体に歩み寄り、

「この不忠者！」

と叫ぶなり、遺体の頭といわず顔といわず、長靴で滅茶滅茶に蹴とばしたそうである。

それを見ていた人達はあまりのむごさに息をのみ、彼の母は気を失ってその場に昏倒した。

「だって、弟はもう死んでいるんですよ。それを、それを・・・あんまりひどい」と泣きくずれる彼の姉。

やりやがったな、この憲兵の鬼ども！

しかし当時の憲兵なら、こんなことは平然とやるだろう。さもありませんと思うだけである。

何もかも狂っていたあの当時の日本は、世界一の非文明国であり、世界に冠たる野蛮国であった。そんな天人ともに許さざる暴虐行為を自国民に対して平然と犯している国が、世界中を相手にした戦争に勝てるはずはないのである。神が許さない！

この二人の憲兵はその後どうなったろう。戦後はなに食わぬ顔をして日本社会の一隅でのうのうと暮らしたのだろうか。こんな奴ら、ただじゃおけない。草の根をわけても探し出し、失神したその哀れな母親に代わって、それこそめちゃくちゃに殴り倒してやりたいと思うのは私一人だけだろうか。

戦前、戦中の暗黒の時代、ときの権力に便乗して暴威を振るった庶民の敵、かの憎むべき憲兵と特高警察。許し難き奴らとして看過できない、時代の生んだ悪魔の落とし子であった。

3. 「内地沖繩編(1) 白木の箱」より

さらに前線に進むとそれもかなわず、箱の中は何もない空っぽなのである。

問題はその空の箱の処置である。遺族の心情を思うとき、空の箱を渡すのは何としても堪えられぬ。鳩首協議の結果、死なば共にと誓い合った戦友同志の間柄、たとえ他人の遺骨であれ供養されれば同じことではないか。遺族を悲しませるのは何とも堪えられぬ。英霊への冒とくにはあたるまい、英霊も冥してくれるのではないかと他の箱から分骨することに決定した。遺族をあざむく行為におののきながら震える手で白骨を空の箱に分け入れ、絶対他言無用を誓い合ったのである。

この行為の是非は未だに心に決めかねており、終生いえることの無い心の傷として残っている。

4. 「内地沖繩編(2) 私の戦場体験記」より

明け方四時頃までに指定地に着き、その付近に散乱している友軍の戦死者七、八名をかき集めて、戦死者の腹を裂き、臓物を取り出し、自分の上衣のボタンをはずして、胸のあたりに押し込み、またズボンの破れた部分から押し込んだ臓物をはみ出たせて、死体群の中に入ってあたかも自分が死んでいるかのように偽装した。

死者のギョロツとむき出した目の視線が鋭い矢になって、皮膚を貫き、肉を裂き、骨を刺すのを感じた。

その矢は幾千、幾万本にも感じられた。私は歯をくいしばって、この非人間的で残忍な行動の汚辱感と戦いながら、冷静さを失うまいと必死だった。ピュッ、ピュッと弾丸がかすめ、間断なく周辺に作裂する砲爆の轟音で地面が揺らぐ、風を裂いて突刺さる鉄の破片、黒煙、白煙そして砂塵が優々と立ちこむなかで、体と並んで横たわり、じっと敵のM四戦車を待った。段々と意識が混濁して自分が生きているのか、死んでいるのか、分からなくなった。

ふと、首筋や顔を這い廻るウジ虫で我に返り、臓物を取り出された戦死者の身が、明日の我が身か、戦死してもまだ死体となって戦闘を続けなければならぬとは・・・「あ！

これが戦争か！」と心の中で呪った。こんな作戦自体もはや末期的兆候だ。

この決死の特攻作戦は、戦果をあげることが殆どなかった。M四戦車は八〇メートルか一〇〇メートル先から機銃掃射をしながら前進し、六〇メートル位になると今度は、火炎放射攻撃に移り焼き払いながら前進して来た。この攻撃で、辺り一面真黒に焼き払われてしまう。十知の爆薬を持ってM四戦車に近寄ることなど到底不可能であった。

硫黄島には、ただ一つの川もなければ、また井戸もなかった。水は雨水以外一滴も得られない島であった。水を飲めず「渴」で何千という兵士が「水、水！」と叫びうわごとを言いながら死んでいった。

こんな時、まわりの者が誰も水を持っていないかという、決してそうではなかった。水の入った水筒を二つも三つも持っている者もいた。皆、自分が死ぬ時にはせめて一口の水でも飲んで死にたいと思っていた。生きることよりも水をのむことだけが唯一の望みであり、願いであった。もし敵に壕の入口を塞がれ、三日も四日も壕を出ることが出来なくなれば、水汲みも出来なくなる。そのため今、横で水を欲しがりながら死んで行く者に対し、一滴の水も与えることが出来なかった。

三、四日間、水を飲むことが出来ず、頭の中が水、水と水のこと一杯になると、他人の水筒の水音がごうごうと流れ落ちる滝のようにも、又サラサラと流れている山合いのせせらぎにも聞こえた。兵士達は壕内を歩く時は、水筒を胸に抱えて音を立てないように注意深くなった。水筒の水音を聞き、突然発狂して人の水筒にしがみつき、殺し合うことも希ではなかった。負傷者は、誰もかえりみる者もなく、うんうんうなっていれば、「うるさい！」と叱り飛ばされ、時には一気に首をしめられて殺される始末であった。こういう光景も、自分一人生きるのが精一杯で、それをとやかく言う者は一人もいなかった。もはや敵は米軍だけではなく同僚達でもあり、更なる緊張と警戒が必要となった。

5. 「内地沖繩編(2) 私の戦場体験記」より

米軍の攻撃は、朝十時頃から夕方四時半頃までと日課が決まっていた。壕に対しての最後の手段は水攻めであった。私は、壕脱出が一日遅れた為、二度も水攻めを受けた。米軍は、水攻めの時は必ず、明日は水を壕内に入れると予告し、余裕を与えてくれた。初めての時は、兵士達はバケツリレー式で入れるぐらいに甘く考えていた。逆にこれでたらふく水が飲めると喜んだ。しかし実際は、何と海水であった。米軍は、海岸からポンプを使いホースを繋ぎ合わせて滝のように流し込んできたのだ。凄まじい勢いで流れ込んだ海水は小一時間程で腰の辺までになった。真っ暗な壕内は恐怖の為パニック状態になり、右往左往の大騒ぎとなった。

ぶくぶくと浮かぶ死体、おびただしいゴミや汚物を掻き分け、蟻の巣伏になっている壕の中を高い所、高い所と探して逃げ惑った。海水が入ってくるのが止まり、暫くすると、誰もが予想もしなかった事態が起った。大音響と共に壕内は火の海となった。はっきりとは判らぬが、海水の上にガソリンを流し込み、ダイナマイトを仕掛けたのだろう。逃げ遅れて、上半身を焼かれた数十人の姿が、真赤に燃え盛る炎の中に映った。彼等の「助けてー」という悲鳴と絶叫が壕内に響きわたった。まさに地獄絵を見ているような凄惨な光景であった。炎の中で、もがき苦しみながら「水、水、水をくれ！助けて！」と絶叫しながら近寄ってしがみついた、その人はそのまま死んでいった。

自分が助かることしか考えなかった私。水の一口も飲ませてあげなかった私。極限を生きのびて、この手記を書きながら戦場で死んでいった人達の怨念が容赦なく襲いかかり、

その罪の深さにおののいた。

義務だ、盡忠報国だと応召された彼等は、水を飲みたくとも水はなく、食べたくとも良糧もなく、「渴きと飢え」に耐えきれず死んでいった。

人間性を失った人間はどれほどあさましくなるか、そしてけだもののようになった人間を見た私は、その後人間性というものをどう信じたらよいのだろうか。

戦争は残酷だ、悲惨だ、恐ろしいと言葉で人は表現するが、そのような言葉で表現することが出来ないほどの恐ろしさを体験して、真に平和を守り抜くことが、生き残った者の義務だと切に思う。

6. 「中国編(1) 首切り」より

そこには十二名の支那服を着用した、農民と見られる者が、後手に縛られて座っていた。その各自の前には二米にも及ぶ穴が掘られていた。その穴は彼ら自らに掘らされた穴だった。ここまできると、どんなことが行われようとしているのか、理解できた。憲兵軍曹が出て来て、やおら刀を抜いた。我々初年兵の他に、かなり多くの見物人があり、将校の姿もあつた。

映画のシーンの一片のように、おもむろに憲兵は刀に水をかけ、農民の後に立ち、何やら中国人に言った。「不用の返事と共に、彼の刀が一閃、農民の首は体を離れ穴に落ち、首から鮮血が迸った。憲兵は素早く足で胴体を穴に蹴おとした。次の者は、終始それを見ていたが、覚悟をきめていたのか、諦めたのか、一言も発せず同じ動作で穴に落ちた。

四、五人切った後、「誰か切りたい者は」の声に、見習士官が応じた。彼は自分の刀を抜いたが、多分、家伝の宝刀だったようだ。憲兵のように水をかけ、最上段に構えたまでは、芝居の花道を思わせたが、気合もろとも打ちおろした刀は、農民の肩から首にかけて切りおろされ、鮮血が流れたが農民はそのまま何か大声で喚いている。二度、三度きりさげ、ようやく穴に押し込んだが、伝家の宝刀も使い手によっては切れないようだった。憲兵は、まるで大根でも切るように、手捌きよく残る者を片づけたが、彼にすれば衆人環視の中、得意満面だろうが、切られた農民はどうなのだろう。

帰る私達は、あの場面がちらつき、言葉もなかった。二、三日は、飯も喉を通らなかった。後で、あの農民姿の者は、スパイであると言われた。もし、中国軍が日本に侵攻したと仮定した場合、日本軍に不利な状況を中国軍に提供するだろうか。農民たちが「私は知らない。或は反対方向に行った。の情報をもらした。」即それは、スパイの名のもと、首を撥ねられる原因と知った。

この無法な行為は、中国に進行した部隊では、日常茶飯事であり、仮に、中隊に初年兵が入隊する度胸だめしとして刺殺させた事を考えると、この犠牲者のみで、一万人以上の虐殺があつたことになる。それにしても、彼ら農民は泣き喚きもせず、平然としていた姿が目につく。

7. 「中国編(2) 肝だめし」より

私は本物の人間を、と思うと体がわなわなふるえ出した。四人がかりで橐の木に縛り付け、そして血のしみた襦袢を引き裂き目かくししようとした瞬間、男は、「不柏鬼子必順復仇」、こわくない、お前ら必ず仇を取ってやると叫んだ。恐れを知らぬ鬪魂が兵隊たちの心胆を貫くように見据えていた。

教官が軍刀を引き抜き空中で躍らせながら、「突込め」と命令した。ファー私は真先に無我夢中で突っ込んだ。だがその銃剣が狂い、肩先にカツと剣先が二寸ほど刺さった。

「何だ、その突き方は」、分隊長の帯革が私の頭に飛んできた。二本目も失敗。「馬鹿者、胸を突くんだ」、「ハイ判りました」。農民は引きしまった顔に真一文字に結んだ口、燃える様な眼で兵隊たちを睨みつけていた。

私は半ば泣き面で恥も何も考えず飛び込み、二本目で左胸部にズブリ、薄気味悪い音をたて、同時に銃剣と軍服に血しぶきを浴びせかけられ、あたり一面に飛び散った。「それ突込め……」、大林や他の初年兵も一斉に突込んで見る見るうちに蜂の巣の様にした農民が最後に残した一言は「日本鬼子」だった。

「初年兵全員の度胸試した、次々突込め」、血まみれの農民の腹の皮が破れ、肉と大腸がえぐり出された農民の眼が何時までも睨んでいた。教官も恐れたのか「目玉をえぐり取れ」と言った。

五、六本の銃剣がおそい掛かり、頭、顔、胸、ところきらわずズブズブ突き刺した。チョビ髭教官もやっと安心したように「とうとうくたばったか」。

ああ、俺は初めて人間を殺した：・：・、血のしたたる銃剣が私の両手の中でガタガタふるえていた。

(中略)

罪行と悔恨

私は今、六〇年前の極悪非道きわまりない実録をつづるとき、純真な農民親子に対して行った滔天の罪行を見つめ、悔恨の情を抑えることが出来ない。

私は、愛する夫、父を奪い家族を無惨に引き裂き、平和な生活、労働を愛した農民の生命を何の理由もなく殺害し、牛をかつぱらい、後に残した母子の生涯を台無しにしてしまった。同じ農民の子として生まれ、土に生きる人間ということを忘却した、全くけだものに等しい自己の前半生を悔い、日本帝国主義が行った侵略戦争を呪わずにはいられない。このような罪悪行為は何処の部隊でも日常的に行なわれていた。

8. 「中国編(2) 中国戦線従軍の記録」より

平和な時代の家庭の中で、殺すか殺されるかの戦場を写すテレビをどうして寝ころんでなど見られようか。銃弾を避けてうづくまる兵士、泥濘の道を疲れきって行軍する兵士—どれも六十年前の自分の姿である。顔に布をかぶせて担架で運ばれる兵士、ざん壕の中で身をもたせかけたまま死んでいる兵士、それは、分秒の差で私自身もそうなり得た姿ではなかったか。今、こうやってテレビを見る立場にいられることを思うと、私は厳粛な思いにならざるを得ない。妻や子供たちとの団らんの和やかさは、あの時の分秒の差で他人とって代ることがあったのである。

9. 「中国編(4) 慟哭の満州 日本軍が無条件降伏をした！」より

「その子供、どうするの！」

「連れて行くんなら、私達とは別に行ってよ！傍杖くうのはごめんだよ！」

この避難行のなかで、子を持つ親達にとって最悪の危機であった。親達といっても両親揃っているのはなく、殆んど全部が母親だけである！それが、

” 皆んなと離れ、子供を連れて歩くか？”

” 子供を捨て、皆んなに尾いて行くか”

との二者択一を迫られたのである！それも、即決断せよ！

” 或る人は、泣きながら幼児の首を絞めた！そして、出発直前まで、しっかりと抱きしめていたが、出発のとき、裏山にソオーッと置き、その上に小石を積重ねていた。

” 或る人は、殺してもやらず、泣きやまぬ吾が子を、この家の中に置いたまま姿を消した。

” 或る人は、子供が油断した隙に、裏口から逃げ出した。この子供達は後になって母親のいないことを知り、必死になって探すことだろう。

が或る人は、しっかりと吾が子を抱きしめ、グループの皆んなの出発を放心したように見送っていたが、子供を抱いたまま、同じ方向に歩き始めた。

10. 「南方編(含硫黄島)(1) 斃れた兵の胃の内容物を食う」より

彼の話は続く。

「敵弾に斃れた兵の胃袋を割っさばいて、消化してない内容物をそのまま食った!! そんなのは序の口だ。それからだよ!!」

「銃の音もしなくなった。何日も食う物が無いから、水ばかり飲んで生きていた。敵を前に、その水も手にするのは命がけだった」

「夜の露を舐めて渴きをいやし、瓦礫に溜まった雨水を飲んで、空腹にふらふらしながら、食う物を求めて徘徊した」

「ある時、部下の一人が徘徊するうちに、『近くにいた生存者から、肉を分けて貰った』と言って持ってきた」

「部下は『何の肉だか言わなかった』と言っていた」

「とにかく火を起こして煙が立たないようにして飯盒で煮て食った」

「空腹だったせいか、とてもうまい肉だった」

「それに味をしめて、次の日も貰いに行った」

「何の肉か相手はやはり教えなかった、当方からしつこく追及されてやっと白状した」

「いまどき、何の肉があるって言うんだ!!… 考えてもみろよ!! だいたい想像できるだろう。お前らだって飢え死にしたいだろう。誰も生きる為だ。神も仏も見ているさ!!」

「その男は、殺害を否定しようと必死だった。男は、『何かの本で読んだ事を実行しただけだ』と強気なことを言っていた」

「弱って死にそうな奴を拳銃で撃つ。

息の根が止まるのを待って一斉に肉の塊を切り取る。そしたら次の標的を選んでおくのだ」

「負傷者でも抵抗する奴は殺らない。でも、標的がなくなると狙われた。抵抗できない弱っている奴ばかり襲われた」

「顔見知りの者が餌食になった時は、さすがに戸惑った」

「最後の部下が出て行ったきり、戻ってこなかった」

「狙われるのは自分だけになった」

渡辺氏はその恐怖をこう語った。

11. 「南方編（含硫黄島）（2）生と死の岐路」より

あの昭和十九年後半ともなれば、日本海軍もたび重なる海上決戦の果てに、その水上艦艇の大半を喪失し、陸兵を満載した船足の遅いおんぼろ輸送船の護衛に回す艦艇など、もうほとんど底をついていた頃である。そういう状況を知悉しながら、なおかつ南方戦域に陸兵を送る作戦を企画、立案した陸軍上層部の将軍や参謀は一体、兵士の命をなんだと思っていたのか。彼らは輸送船など十隻行って二、三隻も目的地に着ければ御の字と思っていたのだろう。そういう連中こそ真づ先に輸送船に乗り込むべきなのに、彼らは東京の大本営でぬくぬくとし、殺されたのはみな、前途有為の若い下級将兵だけであった。彼らのやったことは悪魔の所業である。兵隊のいのちは天皇陛下にこそ捧げ奉るべきものとの、明治以来の皇民教育に絶対の自信を持っていた彼らは、兵隊のいのちなど、虫けら同然にしか思っていなかった。戦争初期にこそ日本にも相当数あった優秀な快速輸送船も、戦争の長期化とともにアメリカ側の攻撃によって撃沈され、この頃には日本には船足ののろい、旧式のぼろ船しか残っていなかったのである。そんな船に兵士を乗せて南方戦線に送る作戦を彼らは平然と決定したのだ。

昼は制空権を握ったアメリカ空軍機が上空を乱舞し、夜はアメリカの潜水艦がうじゃうじゃと待ち構えている魔の海域へ、日本のぼろ船の集団が、ろくな護衛もつけてもらえずに、よたよたと出て行ったのである。こんな日本輸送船団を撃ち漏らしたら、それこそアメリカ軍こそどうかしている。しかし彼らは見逃しはしなかった。その技術力と物量とに物を言わせて、日本輸送船を徹底的に攻撃、撃沈した。

しかし、その撃沈された日本輸送船団の一隻一隻には、前途に無限の可能性を秘めた、日本の優秀な若者の大集団が乗っていたのである。

思うに戦死の形態は多種多様であろうが、乗っていた輸送船の沈没による戦死ほど悲惨なものはなかろう。運よく海上に投げ出された人には救助される機会も残されようが、甲板へ昇る梯子が僅か一つか二つしかない輸送船の暗い船底の、蚕棚のような寝台にぎっしりと詰め込まれ、窮屈な眠りを強いられていた大勢の日本兵が、魚雷のすさまじい爆発音と衝撃で、裸電球が一瞬にして消え、漆黒の闇の中にどっとばかりに流れ込んで来た海水の奔騰に巻き込まれながら、なんとかして上部甲板に通ずる梯子にたどり着こうと必死にもがいている姿と、その瞬間の彼らの絶望感とは想像に余るものがある。彼らの意識は瞬時にして杜絶し、彼らは船体と共に、再びは浮かび上がることのない千尋の海底へと沈んで行ったのである。

彼らとて、いつの日か、懐かしいふる里の鎮守の森を、もう一度見たかった。必ず生きて帰って来ると約束して別れて来た、いとしい恋人が待っていた。愛する相手と結ばれて、幸せな家庭を作りたかった。家業を継いで、父母に孝養を尽くしたかった。五十年

後、六十年後までも生きて、もって生まれた天寿を全うしたかった。このような、人間として当たり前過ぎるほどの願望の何一つとして叶えられることなく、この上もなく健康で、何の罪も犯していない若い若い男の集団が、彼らが神がかり的な軍国主義の荒れ狂うこの国に生まれてきたという、たった一つの理由のために、生を享けた国の愚劣で残忍な戦争指導者どもの生けにえになって、大海原の海底深く沈んで行かなければならなかった。